

女子非行少年の臨床心理学的研究

——ロトルンシャツハ検査像——

前 田 栄

非行又は犯罪の科学的研究が始つたのは極く近年のことである。十九世紀末、イタリヤのロンブローゾが犯罪人類学の立場から生来性犯人説を提唱した。現在、この学説をそのまま承認する者はないが、彼の研究は後の近代科学的犯罪研究の嚆矢となつた。

その後犯罪生物学の立場から、犯罪者の遺伝、素質に着目し、精神病質精神薄弱の犯罪との親和性が発見された。中でも精神病質は犯因性傾向の強い慣習性犯人の殆どすべてがそうであると考えられた。一方、犯罪は素質によるか、環境によるかということが古くから論議されたが、社会的環境の影響を強調する犯罪社会学の立場がある。中でも著名なのはドイツのエクスマーの研究で、経済的変動が財産犯罪の増減に明瞭に影響を及ぼしているという説明である。彼は長い期間の経済的变化を経済発展とし、短い期間の一過程の経済変化と経済動揺とし、これらの要因によつてドイツの犯罪曲線を功妙に説明した。我国に於ても犯罪曲線の週期的変動は主として経済変動に由来することを小野は証明している。

一方アメリカの社会学者は犯罪を集団要因によつて説明せんとする。即ち、社会解体によつて起る文化葛藤、それから生ずる

異常な行動規範、それに基づく犯罪集団の形成という一連の系列を考えている。体質や異常人格特徴でなく、文化の状況による犯罪の説明である。このような説では個人の差異は無視され、専ら外的な力を犯罪の要因としている。これらの動きと相まつて一方では精神分析学的見地からの犯罪観が提唱されている。即ち、幼時よりの外的体験によつて影響された性欲の歪みの結果が個人の反応傾向を決定し、意識的な動機は無意識的機能の象徴にすぎないとする。無意識的コンプレックスや罪業感、幼時の心的体験を強調し、非行、犯罪に至る心的態度が形成されるとする。少年非行の科学的研究の祖といわれるヒューリーは、正統的精神分析学派の立場とはやや異なるが、特殊体験による精神葛藤から非行に発展する例を、比較的多数発見した。精神分析学の立場に立つ者は徹底的な環境中心の考え方である。アイヒホルン、アレクサンダー等はこの派の代表である。

従来犯罪の原因として素質か環境かという点に関し、犯罪研究の焦点がおかれてきたが、犯罪人類学、犯罪生物学、犯罪社会学においては、素質又は環境に対する考え方が一方的、固定的である。メツガーは動力学的立場を提唱し、この問題に解決を与えた。即ち犯罪は個人の生活と社会共同体の全体との間に発生する個性的事象であつて、一般化されるものではない。従来普通の考察法と、個性的考察法と両者の融合がはからなければならない。即ち動力学的考察法は素質、環境という個々の因子が現実的效果を發する前に、相互に様々に影響しあつていと考へる。例えば貧困という環境は意志薄弱的な性格に対しては犯罪として大きな意義があるが、勤勉な努力家には積極的奮闘に拍車をかけるような意義をもつてゐる等である。素質は固定したものでなく、たえず変化しうるものである。又環境も人格と独立した存在ではない。個人により環境に対する受容能力に差異があり、環境を選択し形成してゆくのは人格の能動的な面である。環境は人格形成に影響し、種々の行動の誘因を与える。それ故、環境と人格との相互関係は複雑である。

犯罪又は非行の研究にあつては多くの立場からの考察がなされるべきであつて、偏つた観察をさけることは当然であるが、中心はパースナリティ、環境を含めて人格の問題を追求すべきであらう。

今回、女子非行少年のパーソナリティ研究を臨床心理学的立場から試みるにあたり、投影法の一つであるロールシャツハ検査を用いた。検査結果を統計的に考察し、非行少女のパーソナリティ構造の特質のいくつかを考察せんとしたのである。

ロールシャツハ検査について若干の説明を試みよう。あいまいな刺激材料、構成材料を示して、被験者に自由に応答させたり製作させたりする検査を投影法という。この種の検査には絵面統覚検査(TAT)、ロールシャツハ検査等いくつがあるが、その特徴は構造性テスト(質問法の如きもの)と異つて被験者に警戒心を起させることなく反応させることが出来ることであり、人格の統一的、多面的、力動的特徴を仮説的に導き出すことが出来ることである。意識的傾向のみならず、無意識的傾向も明らかにすることが出来、単に問題があるということのみならず、その問題の原因をも指摘しうるように、分析がすすめられるという点に特徴がある。

ロールシャツハ検査は原版では十枚の図版から成つている。濃淡ある黒色のもの、赤と黒のもの、種々の色で画かれているものの三種がある。今回使用したのは早大版であつて、黒色で濃淡あるもの四枚、赤と黒のもの二枚、種々の色のもの二枚、計八枚のカードである。絵は左右相称のインクのしみの如きものである。図版の被験者に一枚宛提示し、「これは何に見えますか」ときいて答えを記録する。その答——反応を(1)絵のどの部分について反応したか、(2)どの要因(色、形、明暗、運動)によつて決定したか、(3)反応語の主要な内容、(4)その他特徴のある言葉の吟味等の諸点から分類整理し、それによつてパーソナリティの諸特徴を調査把握する。

検査上の諸条件

対象は女子少年院在園者一〇〇名及び、統整群として同年令の女子高校生及び女子大学生三〇名。

検査期日は昭和三〇年四月から十二月まで、年令は十五才から二十才まで、平均十八・一才。

知能指数は、非行少女は最低六八、最高一三〇、平均九一・六、標準偏差一三・七、統整群の測定は出来なかつたが、かなり高いと思われる。

第一表 反応結果(平均値)

	非行少女		学生		差の有無 (5%)
	実数平均	%平均	実数平均	%平均	
年令	18.1才		18.9才		
I. Q	91.7				
R	24.7		32.8		なし
W	5.7		12.4		
W'	0.9		0.7		
D	15.2		16.1		
Dd	1.7	6.4	1.4	3.78	
WS	0.8	3.38	1.1	3.5	
DS	0.5	1.45	0.8	2.27	
S	0.2	0.66	0.3	0.6	
W%		33.2		49.5	あり
S%		5.5		6.3	なし
F	16.4	67.8	14.5	42.7	あり
M	2.1	8.87	5.1	17.3	あり
FM	1.7	6.2	2.5	8.7	なし
Fm	0.2	0.5	0.1	0.5	
mF	0.3	1.0	0.03	0.08	
m	0.04	0.2	0.1	0.4	
FV	0.3	1.1	0.6	1.8	}なし
VF	0.06	0.2	0.03	0.1	
FT	0.7	2.2	1.4	4.9	あり
TF	0.1	0.5	0.2	0.8	}なし
T	0.06	0.2	0.06	0.1	
FY	0.3	1.3	1.5	4.9	あり
YF	0.2	0.5	0.9	2.3	}あり
Y	0.1	0.5	0.1	0.5	
FC'	0.5	1.9	1.8	6.5	}あり
C'F	0.02	0.1	0.1	0.4	
C'	0.1	0.5	0.2	0.5	
(明暗計)	(2.44)		(6.86)		
FC	0.8	2.9	3.0	8.4	あり
CF	0.8	3.1	2.0	6.0	あり
C	0.6	2.2	0.5	0.8	なし
(色彩計)	(2.2)		(5.5)		

上
有
す
る
者
が
あ
る
が、
重
い
と
思
わ
れ
る
方
に
分
類
し
た。
非
行
の
種
類
は、
窃
盗
四
〇
名、
虞
犯
三
四
名、
覚
醒
剤
取
締
法
違
反
一
五
名、
詐
欺
六
名、
売
春
五
名、
な
お、
非
行
の
種
類
は
一
人
が
二
つ
以

第二表 反応結果 (平均値)

		非行少女		学生		差の有無 (5%)
		実数平均	% 平均	実数平均	% 平均	
F + %			67.6		71.0	なし
A %			59.6		45.6	あり
Z %			9.5		16.6	
P		2.6		2.3		
O		1.5		2.1		
把握型	W 優勢	39人	39.0	21人	70.0	} あり
	Dd 優勢	15	15.0	1	6.6	
	その他	46	46.0	8	23.3	
体 験 型	B ₁	30	30.0	16	53.4	} なし
	B ₂	25	25.0	2	6.6	
	A ₁	15	15.0	0	0	
	A ₂	2	2.0	2	6.6	
	A ₃	1	1.0	1	3.3	
	FB ₁	17	17.0	7	23.3	
	FB ₂	10	10.0	1	6.6	
FC > CF + C		22	22.0	14	46.6	} あり
FC = CF + C		6	6.0	6	20.0	
FC < CF + C		34	34.0	8	26.7	
OC : OCF + OC		38	38.0	2	6.6	
無彩色 > 2 色彩		9	9.0	7	23.4	} あり
無彩色 > 色彩		11	11.0	4	13.4	
無彩色 = 色彩		15	15.0	3	10.0	
無彩色 < 色彩		36	36.0	14	46.6	
O : O		29	29.0	2	6.6	
M > 2ΣC、F% > 50%		20	20.0	3	10.0	なし
M > 3M		26	26.0	23	85.5	あり
F% > 50%		81	81.0	9	30.0	あり
M > 2FM		23	23.0	10	33.3	} あり
M > FM		18	18.0	11	36.7	
M = FM		21	21.0	3	10.0	
M < FM		25	25.0	4	13.4	
OM : OFM		13	13.0	2	6.6	
M > FM + m		35	35.0	21	70.0	
M = FM + m		19	19.0	2	6.6	
M < FM + m		33	33.0	5	16.7	
OM : OFM + Om		13	13.0	2	6.6	
ΣC 平均		2.03		4.21		

結果の考察

第一表、第二表に非行少女の反応結果及び結果解釈の助けとして同年令の女子高校生及び女子大学生の反応結果を示した。何れも平均値であり、実数及び百分率で示した。反応のうち主要な点を考察してみよう。

反応総数 (R)

集団としてみる場合、反応総数は知能の高さを表すとされる。成人の反応総数は平均三二であり、又正常反応量は二五―四五位である。反応総数は情的要因検査場面などに影響をうけるとされている。今回の非行少女の平均は二四・七(標準偏差一二・八)で、一般の標準よりやや少いが、正常反応量に属する。しかし学生群の平均三二・八(標準偏差二〇・〇)との間に有意差はない。但し非行少女の特異な現象として総数七以下の者が七名みられた。学生群にはない。総数七以下ということは八枚の図版中少くとも何れかの一枚以上を拒絶したことを意味する。

全体反応 (W)

全体反応は知能の質及び高さを示し、総合と組織の働きを意味する。非行少女の出現量、三三・二%は普通であると考えられる。学生群の四九・五%は有意差をもつて高く、これは学生群の知能の高さを表すものである。

細部分反応 (Dd)

これは普通の人に見逃されるような微細なものへの興味によつて起され、又正常な生活から逸脱した何者かへの執着、良い成績を得たい、不平を言うなどの解釈がなされている。普通の出現量は〇―一〇%とされているので、非行少女の六・四%は一般的には問題はない。ただ非行少女の中に二五%を起える者が七名みられるが、学生群にはない。この点から、非行少女の群の特質の一端、即ち極端な反応傾向を示す者の存在を知ることが出来る。

間隙反応 (S)

これは被験者の強い態度を表し、体験型によつて解釈は異なるが、反抗的傾向を示すものとして非行群に高い出現率を期待され

ることが多い。今回の結果は非行少女五・五%、学生群六・三%であり、普通の出現率は五%以下となつてゐるから、両群とも大差はない。

結合性反応 (Z)

これは知能の投影であつて、結合力、組織性、生活内容の合理化、有意化を示すと解釈されている。標準出現量は一〇〜四〇%とされる。非行少女九・五%、学生一六・六%は標準量であるが、標準量以下の者について考察すると、非行少女では一〇%以下の者が六四%あり、学生には四〇%であつて、その差は有意である。これは両群の知能の差に基くものと思われる。

形体反応 (F)

良形体反応 (F_+) と不良形体反応 (F_-) に分けて考えられ、その意味は異なるが、 F_+ が五〇%を超えるような場合は、社会的適応性及び情緒生活が彼の思考過程によつて制限をうけていると考えられている。非行少女の F_+ 、六七・八%はこの意味で可なり高いものといわねばならない。五〇%以上の者が八一%を占めている。学生は平均四二・五%、五〇%以上の者が三〇%存在するのと比較すると、その差は有意である。学生では F_+ が七〇%を超える者はないのに、非行少女では五三%も存在する。高い F_+ の意味する、行動の固定化、rigidity の高いことは今回の非行少女の反応傾向の大きな特徴である。

形体反応は前述の如く F_+ (良形体反応) と F_- (不良形体反応) に分けて考えられるが、 F_+ は意識的統制力(自我の力)の強さを示す。又パースナリティ診断に当り F_+ は安定度の尺度を提供する。又知能の高さも示す。 F_- はそれらの逆を示す。今回の結果では F_+ は非行少女六七・六% (標準偏差一九・〇八)、学生七一・〇% (標準偏差一七・〇九) であり有意差はない。標準出現量は五〇〜六〇%とされるが、両群共やや高い。(M)

運動反応 (M)

特に人間運動反応 (M) は精神活動の旺盛さを表すものとして、色彩反応と共にロールシャツハ検査においては重要な意味をもつてゐる。創造、想像、洞察、空想等思考の働きによる知能の高さに比例した量を算するものと考えられている。標準出現量

は成人で——四個とされている、検査結果では非行少女二・一個、学生五・一個であり、その差は有意である。非行少女にはM反応のない者が二三%あり、学生には六・六%であつた。この事は二つの群の知的精神活動の旺盛さの差を示すものである。

M反応は批的考察と共に質的、内容的な吟味を必要とする。次の諸点から考察してみよう、(1)個人の欲求の投影が明瞭に表れたもの、(2)形体の不良(M)、(3)内容が異常又は病的傾向を有するもの、(4)喧嘩、争い等を示すもの。

(1)非行少女の例をあげると「一生けんめい出ようともがいている」「救いを求めて叫んでいる」「くたびれて横になつて休みたいのでバット足を出して寝ている」「光を求めている」「のがれようとしてもがく」「もつと昇つてゆきたいの从上から抑えつける」「罪深い人間が何かを求めている」など、彼の心を庄する力、それをのがれようとする心的努力、日常の思考内容などが投影されているのがみられ、一四個ある。学生にはこのようなものはみられなかつた。(2)形体不良(M)は非行少女に九個四・三%、学生群に二個、一・三%みられた。(3)異常な内容をもつ例は非行少女のみにみられた。例をあげると「首のない人間が踊つている……魂が抜けてゆく」「殺し合つている。赤いのは魂が抜けた瞬間」「地獄に罪のある靈魂が入つてゆく、赤いのは靈魂」「苦しんで脂汗を流している」「地獄の底でうごめいている」等々であり、罪の意識が投影されているものが多い。学生群にはない。(4)争いに関するものは非行少女には単純な「喧嘩」「取りつこ」などの他に「物すごい勢で喧嘩している」「喧嘩して血が流れている」「おそろしい赤い物を取りつこしている」等々の生活に関係あるものがみられた。学生にも「人生の生存競争」「論争して、しおれている」等やはり生活と関係のあるものがみられた。以上の反応語から非行少女のおしつめられ、歪められた心理をうかがうことが出来る。

動物運動反応(FM)

FMはM、人間運動反応との対比において意味をもつ。精神発達が遅れている者にはMより多くのFMが出現するといわれる。ゴールドハルプは「情緒的刺激に対して、より意識的でなく、より直接的でなく、それ故に起つてくる感情の性質と方向について

もより未熟な認知をもつて反応する想像的興奮」と述べている。出現量をみると非行少女には一・七個、六・二%、学生には二・五個、八・六%で、有意差はない。MとFの量の関係は、MがFの二倍量が好ましいとされているが $M\sqrt{2} > F$ 、 $M\sqrt{2} > FM$ の關係にある者の数は非行少女に四〇%、学生に七〇%で、学生が有意に多い。これは非行少女の未熟な発達を示すものである。

無生物の運動反応 (m)

クロツパリの解釈によるとにmは屢々投影の意味をもち、パースナリティ内の諸力に対抗する人格構造内の緊張を反映するという。両群ともmの出現量が少いので Fm 、 mF 、mを合算して考察すると、非行少女に〇・五四個、一・六%、学生に〇・一七個、〇・九四%であり有意差はない。ただ非行少女には一〇%~二〇%という高い出現率を持つ者が五名ある。これは学生には見られない傾向である。

運動反応において、MとFMとmの量の比が $M\sqrt{FM} > m$ の關係にあることが好ましい。非行少女は好ましい關係にある者が三五%であるが、学生は七〇%であり、差は有意である。

以上の運動反応に関する諸点から、反応の量的關係、質的關係の双方において非行少女は好ましい關係をもつ者が少い。未発達、精神活動の旺盛でないこと、精神活動の内容においてやや異常な傾向を示す者が多いと云えよう。

色彩反応 (FC、CF、C)

色彩反応は被験者の感情、情緒を投影するものである。その感情の方向は快であるとされる。運動反応と共にパースナリティ構造の解釈に重要な手掛りを示すものである。色彩反応を有する者は、非行少女に六二%、学生に九三・五%であつて差は有意である。即ち、非行少女は色彩反応を示さぬ者が多い。このことはF%、M%と共に考慮して、非行少女群のパースナリティ構造の貧弱さ、情緒的生活の乏しさを示すものである。

色彩反応は形体色彩反応 (FC) 色彩形体反応 (CF) 単純色彩反応 (C) の三種に分けて考察される。CFは個人の主観的感情を露骨に投影するのでなく、むしろ環境に対する適応性、正常な感受性を示すものと解せられ、情緒の発達、成熟の尺度とみられ

る。一般には多くの被験者に必ず表われ、三個を標準とする。非行少女には○・八個しかみられないが学生は二・九個で、標準である。CFは衝動と不安定を投影し、感情の未発達状態、時には被暗示性を意味する。Cは衝動性、爆発性を示す最も激しい反応で、感情の発達段階としては最も未発達なもので幼児型である。成人にみられるCは抑圧でもない衝動に原因するという。FCとCF、Cの量の此は成熟度を示す指標とされる。この問題は後に詳述するが、非行少女に於てはFCとCFの量が殆んど差なく、Cも相当量ある。即ちCFとCを加えたものはFCより大きくなる。非行少女の情的適応状態がここにて示されているといえる。学生の色采反応の量は非行少女の二倍であるが、その半分はFCで適応性を示すものであり、FC・CF+Cの関係は全体として良い関係を示している。即ち安定性をもつた情的状態であるといえる。FCとCF+Cの関係において良い関係を持つ者は非行少女には二二%しか存在しないが、学生には四六%ある。このことは非行少女の特徴をよく示す指標であつて、彼女らの感情的未成熟、社会的適応のまずさを示すものである。

明暗反応 (V・T・Y・C)

これは情的因子であり、その感情の方向は不快である。通景反応 (V) 材質反応 (T) 無彩色反応 (Y) (C) に分けて考察せられる。

通景反応 (V) は自己評価の投影であり、多くは深い自己反省によつて劣等感を醸成することを意味する。非行少女のこの反応は平均○・三個であり、普通である。少数例 (四例) のV反応の出現率が一〇%を超える者がある。学生は○・六六個であつて有意差はない。

材質反応 (T) は触覚的な知覚である。触覚は感情生活の基本であり性生活と関係が深いといわれる。標準グループは僅少しか出現しないが、今回の非行少女の出現数も計一個に満たず、少量である。学生にはやや多くの出現をみ、即ちFTが平均一・四個であり標準よりやや多い。

無彩色反応 (Y及びC) のうち、Y反応は不快の情、圧迫された感情無気力、抑鬱的な気分を投影とされている。色采反応と

対照的な立場にあるとされる。非行少女の出現量は平均一個以下で問題はない。学生群にやや多く(二・二個)がみられた。犯罪者群には高い出現をみるといわれるが、今回の結果は異つた。

c' 反応は色彩反応との関係において考察すべきであり、色彩反応のない記録では抑鬱的傾向を反映し、色彩反応のある記録では芸術的感動性を示すとされる。非行少女の出現量は平均一個に満たず、学生群は二個でやや多い。

以上反応の決定因を表す諸要因の分析において、非行少女の最も特徴的な点はF%の高率なことである。F%の高いことは他の因子、運動反応色彩反応、明暗反応の減少を意味する。F%の高いことは自発性が乏しく、パースナリティの *richity* の高さを示すことになる。この傾向は他の非行少年の研究においても同様な結果を示している。(中西六八%、青木六三%)

反応の内容

反応の内容は被験者の具体的な生活環境、要求、興味を知ることが出来るが、両群共に動物反応が多い。

動物反応(A)は最も容易に、精神的努力を必要としないで反応している。これが知能因子として考えられるゆえんであり、又日常生活の素朴さをうかがわせる指標である。正常グループにおいては四〇%以下が普通であるが、非行少女では五・九六%の出現をみた。学生の四五・七%と有意差がある。

動物反応の率を他の知能因子として考えられているW%、Mの量、結合性反応(Z)、反応総数と併せて考えると、非行少女の知能の高さ及びその質を知ることが出来る。

把握型

精神の融通性を示す。全体反応の優勢な型は抽象性に富み、冷静な思考をなしうる。細部分反応の優勢な型は個人的興味、些細なものへの執着を示し、又屢々不安を持つとされる。非行少女、学生共に全体反応の優勢な者が多い。学生群には著しく多く(七〇%)非行少女(二二九%)とは有意差がある。

体験型

運動反応と色彩反応の比率によつて決定される。我々の体験は内向的、自己中心的になされる場合と、外向的、順応的になされる場合とがある。運動反応は内的精神を、色彩反応は外的行動を代表するとして、体験の仕方を力動的構造によつて把握しようとする。運動反応の優勢な内向型(B₁型、B₂型)、色彩反応が優勢な外向型(FB₁型、FB₂型)、両方が相等しい両向型(型A₁、A₂型、A₃型)に分ける。非行少女に最も多いのはB型即ち内向型で五五%を占める。一般に犯罪者には外向型が多く出現するといわれているので、予期に反する結果となつた。内向型は学生にも六〇%みられる。又一般に女性には外向型が多いが、今回の結果はそれとも一致しなかつた。他の研究の例をみるとシヤハテルは両群共に△△の者が五〇〇例中一位を占めると報告し、今回の結果と一致している。青木、小西両氏は外向型が多いと報告している。

内向型のうち、色彩反応の欠如したB型は、強い抑鬱と空想生活がみられるとされ、外向型のうち運動反応の欠如しているB₂型は自己中心的活動が特徴であるという。又運動反応、色彩反応の両方が欠如したA₁型は強い抑鬱状態、A₂型は神経症候、A₃型は躁状態がみられるとされる。これらはB₁型。FB₂型とはやや異なる意味を持つと考へて、二群について考察すると、非行少女ではB₂、FB₂、A₁、A₂、A₃型の合計は五三%であり、学生は二四%である。非行少女にはそのうちB₂型が最も多く、A型を加えると四〇%となり、これらは強い抑鬱状態を示すものとみることが出来る。この傾向は学生には七%にすぎない。この傾向は非行少女の特質の二つであると老えられる。これはF%の高い傾向とも関連する。

平凡反応(P)と新規反応(O)

多くの人からしばしば述べられるような平凡反応、珍らしく独創的である新規反応についてみると、非行少女の平凡反応は平均二・六個、新規反応は一・五個であり、学生は平凡反応二・三個、新規反応二・一個であり、殆ど差はない。内容的には、運動反応で分析したのと類似の傾向を示し、非行少女は圧迫感、不快感を示すもの、学生には教養ある生活状態を示すものがみられる。

統制を中心とする分析

非行少年を心理学的に考察する場合、自己の人格を統制しうるか否かという点と、適応性の問題が取り上げられるべきである。この点からの解釈を試みたい。

クロツパーは統制の方式に三つのものを考えた。即ち外的統制は外界に対して感ずるプラス、マイナスの誘引力に対して適的な反応をすることである。ある者は社会的に許された方式で誘引力に対する衝動や情緒を表明し、他の者は強引に表現を差止めることによつて表面上の統制を行う。前者は問題ないが、後者は問題を引起す原因を作る。

内的統制は外的統制のあとおしであり、内部から生ずる各種の力を統制し、内的生活の統制である。内的統制のよいことは内的活動が旺盛であるのみならず、空想に流れたりすることがない。抑圧的統制は個人の自発性、融通性を失わしめる。これが強いと人格は歪められる。

外的統制のうち社会化のサインは前述の色彩反応における $\text{C} \cdot \text{O} \cdot \text{C} \cdot \text{O} \cdot \text{C} \cdot \text{O}$ の関係でFCの大なる事である。非行少女においてはよい関係をもちつ者は二二%にすぎず、学生の四七%に比べずつと少く差は有意である。ここに非行少女の大きな特質がみられる。尚シャハテルもほぼ同様の数を報告している。

外界への貧弱な情緒的接触という点が無彩色反応の量の比をみると、非行少女は悪いサインをもつ者が三六%である。無彩色反応(C系+T系)の量が色彩反応の量より多い時は情緒的表明を過剰に統制しているばかりでなく、情緒的表明を適切に行う事が困難となる。無彩色の量が二倍にも達する時は感情障害を考える必要があるが、この傾向は非行少女には特に強いとはいえない。

次に運動反応の量が色彩値の二倍以上で、しかもF%が五〇%を超える者を情緒的接触の貧弱なものともみると、非行少女の約二〇%がこの関係をもつが、学生の一〇%と有意差はない。

内的統制のサインを運動反応の量三個以上あるものとしてみると非行少女では二六%であり、学生の八五%に比べると非常に少い。これも非行少女の特質の重大なる点である。

抑圧的統制はF%が五〇%以上の者をいうが、非行少女で八一%、学生は三〇%である。ここにも大きな差がある。統制の面からみると非行少女は社会的要請に応じた適切な行動をとりうる者が少く、又無理に表現をさし止め、表面的統制を行うもの少い。内的統制は充分でない者が多く、抑圧的統制は大部分の者にみられる傾向である。

以上非行少女一〇〇名へのロールシャツハ検査の結果について概要をのべたが、非行少女は知的に劣っており、異常な反応傾向をもつ者が多く、パースナリティの統制において悪い結果を示す者が多いことが見出された。